

ていばく所蔵錦絵紹介(保永堂版③)

東海道五拾三次之内 舞阪 今切真景



波除けの棒杭と船の帆が印象的なこの図は、^{あらい}新居側から^{まいさか}舞阪方面を描いたもので、遠景に白い富士山の姿が見えます。

舞坂宿と新居宿の間は中世まで陸続きでしたが、明応7年(1498)の大地震と永正7年(1510)の津波で陸地が切れて、浜名湖は海とつながってしまい、そのため東海道は、海上一里を船で渡る^{いまぎれ}今切の渡しで結ばれるようになりました。

ていばく所蔵資料紹介④

林式郵便葉書自動押印機

明治時代の後半になると、差し出される郵便物が増加し、押印作業は困難を極めました。特に、年賀状の消印は大変で、押印の担当者は元日から不眠不休で消印を行い、印軸を握る右手はマメで腫れあがるといった有様でした。

そのため、消印作業の機械化が検討され、明治44年に、逓信博物館職員の林理作考案による林式郵便葉書自動押印機が実用化されました。

機械上部に葉書をセットすると、自動的に1枚ずつ中央の押印部に搬送され、押印後、下部の集積部に格納される仕組みでした。消印能力は1分間に手動式250枚、電動式300枚で、昭和5年頃まで約30台が活躍しました。

